

## ルネサンスを踊る

NHK 便り No.6 2005.11.12

多くの日本人が海外でさまざまな分野にわたって活躍しています。クラシック音楽でも、ヨーロッパのオーケストラで演奏している日本人を集めたら2つか3つ、もしかしたらそれ以上のフル・オーケストラが結成できるとも言われます。音楽家ではありませんがユニークな分野で本場の人たちを超えて活躍している日本人女性に出会いました。



イタリアのちょうど真ん中、長靴のふくらはぎと脛（すね）の間に位置するのは世界遺産都市アッシジです。聖フランチェスコが生まれた町として世界中のカトリック教徒の聖地ともなっている、この美しい町に住んでいるのは小野千枝子さん。イタリア・ルネサンス宮廷舞踊の研究家であり舞踊家です。

あるきっかけから30年ほど前にイタリアに来た小野さんは、この地の歴史と伝統の深さに心を奪われました。そこから何かを吸収したいと思った小野さんが選んだのは宮廷舞踊でした。他の人があまり手をつけていないことをやりたい。チャレンジ精神旺盛な小野さんらしい選択です。そもそもイタリア人でもルネサンス舞踊に造詣（ぞうけい）のある人は少なく、ましてや先生を探すのも大変だったといえます。ルネサンスの時代、大きく花を咲かせた絵

画や建築、音楽は私たちの耳目にもよく触れますが、舞踊はあまり知られていません。しかし貴族たちにとって舞踊は絵画や建築と同様に、あるいはそれ以上に身近なものでした。あるときは結婚式の饗宴（きょうえん）で、あるときは親しい仲間と、貴族たちは自ら舞踊を楽しみ、それは娯楽と同時に重要なたしなみでもありました。当時最もポピュラーだった宮廷舞踊が現在にあまり流布されていない原因のひとつは、その資料がほとんど現存しないことです。

アッシジの西20キロほどに位置するウンブリア州の州都ペルージャの空港に出迎えてくれた小野さんは、優雅でおしとやかというよりも物事をてきぱきと進めるエネルギッシュな方でした。「音楽家たちがCD録音のための練習をしているから見に行きましょう。」到着したその足で向かったのはアッシジのそばの小さな村。ミクロロゴスという古楽器アンサンブルのメンバーがリーダーの家に集まって練習しています。ひとしきり練習のあと、小野さんはメンバーにいろいろ指示を出します。演奏家でない彼女がプロの音楽家たちの演奏に何を指示しているのか気になりました。資料不足は音楽家たちにとっても頭の痛い問題です。宮廷で音楽は単に鑑賞するだけでなく舞踊のための道具でもありました。当時の楽譜にはテンポやリズムの明記がなく復元演奏では解釈が重要なポイントです。演奏のしやすさなどを基準にした勝手な解釈を生む可能性もあります。そこに小野さんの出番があります。長年の研究調査と実践活動が当時のリズムやテンポを正しくよみがえらせるのに役立ちます。

ペルージャの図書館に資料を調べに行く小野さんに同行しました。係員が献上物のようにささげ持って来たのは今から600年以上も前、14世紀の古文書です。ページ色に変色した古紙に当時の表記法による四角張った音符が整然と踊っています。確かにテンポ記号もなく、小節すらありません。もちろん踊りのステップなどの記入もありませんが、白手袋でページをそっとめくるうちにいくつかのステップの図を発見しました。しかしそれもいったいどの曲のステップかはにはわかりません。こうした舞踊に関する当時の書物はイタリア全土でも3、4か所にしかないそうです。それらをつぶさに調べ上げ、実際に体を動かして試行錯誤した成果を小野さんは、自ら主宰する中世ルネサンス舞踊団「ベルレグアルド」で上演し、またレッスンで教えています。生徒はイタリア人のほかヨーロッパの他国からもやって来ます。

「今夜は近くの町に行きましょう。」カンナーラという小さな町のレストランは入口で立ち食いしている人もいるほど盛況でしたが、小野さんの古い友だちという主人が特別に席を用意してくれ、すてきな料理の数々とワインを振る舞ってくれました。長い歴史が刻まれた町で深い真紅のピロードのようなワインを味わいながら、テーブルの下の小野さんの足は無意識にステップを踏んでいます。「舞踊を通してもうひとつのルネサンスを日本人たちにも知って欲しい」「宮廷舞踊をちりばめた中世の物語を映画にしたい」・・・小野さんの尽きない夢に耳を傾けながら、時を遡（さかのぼ）り、ルネサンスの優雅な宮廷舞踊の輪の中にいるような錯覚にとらわれました。

※写真右上は小野さんが主催する中世ルネサンス舞踊団「ベルレグアルド」  
写真左下はサン・フランチェスコ大聖堂